
嘆き姫

れんじょう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘆き姫

【Nコード】

N0609V

【作者名】

れんじょう

【あらすじ】

とある小さな国に『嘆き姫』と呼ばれる心優しい姫がおりました。優しすぎるお姫さまが繰り広げる騒動に巻き込まれるお話です。

ちよつと残酷でちよつと悲しいお話。

第一夜（前書き）

ちよつと残酷な話ですので苦手の方はご遠慮ください。

『本当のグリム童話』のような感じに仕上がればと思います。

第一夜

ある小さな小さな国に『嘆き姫』と呼ばれるお姫様がおりました。そのお姫様はゆるやかにうねる黒髪に豊かな水を讃えた湖面のような深い翠色の瞳をした美しいお姫様でしたが、いつも何かを愁いて嘆いているので、いつしか『嘆き姫』と呼ばれるようになりました。

ある時は「雨が降っているわ。このままでは兵隊さんたちが濡れてしまつて風邪をひいてしまう。なんてお気の毒なのでしょう」といい、またある時は「窓辺にいるすずめさんったら、口にみみずをくわえているわ。みみずさん、尖ったくちばしで掴まれて痛いでしょうに。これから食べられてしまう運命なんて、なんてかわいそうなんでしょう」と言いました。

いつも何かを見つけるたびに「かわいそう」と話すお姫様に、周りの人たちは「お姫様はなんて優しい方なんだろう。あんなになんにでも心を砕いていたのならば、いつしかご自身の心が壊れてしまつだろう。私共がお姫様を守つてさしあげなければ」と思つてました。

そして嘆き姫が嘆く旅に周りの人たちはみな「なんてお気の毒なお姫様」といつて慰めるようになったのです。

嘆き姫が十四歳になったときの事です。

小さな小さな国では嘆き姫の社交界デビューのための舞踏会を催すことになりました。

そこで王様は国中の腕のよい仕立て屋を呼んで嘆き姫に素晴らしきドレスを作るように言いました。

ある仕立て屋は、嘆き姫の美しい瞳に合わせたエメラルドグリーンと深緑のコントラストが絶妙なドレスを仕立ててきました。また

ある仕立て屋は、嘆き姫の瞳に宿った愁いを晴らすような華々しい赤をふんだんに使って仕立ててきました。そしてまたある仕立て屋は、他の仕立て屋のドレスのような艶やかさはないものの素晴らしい流線形のカツティングと繊細なフリルをふんだんに使った清楚な白のドレスを持ってきました。

嘆き姫は言いました。

「どれも本当に素敵なドレス。こんなに素晴らしいドレスを私は今まで見たことがありません。それなのにドレスを一つ選ぶなんて到底わたくしにはできません。もし選んでしまったら他の二つが素晴らしくないなどと思われてしまうでしょう。そんなことは申し訳なくてできるはずありません。だけれど一つ選ばないといけないなんて……私には無理ですわ」

その話を聞いていた仕立て屋たちは「お噂通り、なんて思いやりのあるお姫様なんだろう。こんなに思いやりのある姫様の心痛を取り払わなければ」と思いました。そこで

「王様。それでしたら私めのドレスはお姫様に献上させていただいてもよろしいでしょうか。もちろん舞踏会にお召しただけであれば幸いです」と一人の仕立て屋が申し出ると、

「王様。私めのドレスも献上いたします。そしてどうかこのドレスを舞踏会でお召しください。私めのドレスがお姫様の美しさを一層際立たせて見せること間違いございません」と言葉を添えました。すると今度は残った仕立て屋も負けてはいませんでした。

「王様。私めのドレスも献上いたします。お噂に名高い嘆き姫であるお姫様の舞踏会にお召しただければ、こんなに名誉なことはございません」

驚いたのは王様です。

それぞれに最高のドレスを作っているのです。そのドレスには途

方もない金額と途方もない労力がかかっていました。

ですから、献上ではなく、王様はきちんと報酬を与えるつもりなのです。

だいたい作れと命じたのは王様です。それなのに献上されてしまったのは今後の取引にも差しさわりが出るでしょう。

その時、嘆き姫のほうを見ると、嘆き姫の扇子に隠れた口元がにやりと笑っているように見えたが、心の優しい姫がこの状況で笑うなどということは無いと思ひなおして仕立て屋たちのほうを向きなおしました。

すると仕立て屋たちは王様の関心が自分たちに向いていないと思つたのか、口々にお互いのドレスをけなしあっているではありませんか。

「そんなければしい赤など、十四歳のお披露目舞踏会には全くもって相応しくはない」

「何を言う。そのドレスこそ、たしかにカッティングにおいては素晴らしい出来だと思うが、結婚式に着る白ではないか。その色を選ぶなど愚の骨頂としか言いようがないわ」

「いやいや。その緑のドレスはいただけない。品もなければ若さも感じられないではないか。深い緑など若さの前には跪くほど重いものだということがどうしてわからないのか」

いつまでもつづく言い争いにうんざりした王様がそろそろ文句も言い尽くしただろうと声をかけよう椅子から身を乗り出しました。すると、隣の席から悲しげな泣き声が聞こえるではありませんか。

王様の驚いた声と姫の泣き声に、喧々囂々と言い争っていた仕立て屋たちはその口をぴたりと閉じました。そして嘆き姫が自分たちの言い争いに心を痛められて泣いていることを理解したのです。

「言い争いは嫌いです。そこから何も生まれません。この争いの原因が私であるということが何よりも情けなく辛いことです。どうか今すぐこの争いをおやめ下さい」

その言葉に仕立て屋たちはお互いの顔を見合わせて、気まずさから顔を俯けてしまいました。

「それではこうしましょう。その三着とも舞踏会で順番に着たらどうかしら。どのドレスが一番かは当日まで内緒にして。けれど同じ時間分着ることにしましょう。そうすれば公平になると思うので、すがいかでしよう、皆さま方」

王様はこれにはどう返答していいか悩んでしまいました。

だってドレスは一着あれば十分だからです。

それなのに残り二着を買うとなれば、不必要な経費を国庫から出さなければなりません。それはとても無駄に思えました。

しかし仕立て屋たちが言うように献上してもらうことにも抵抗がありました。

なぜならその言葉をうのみにしてしまつて手に入れてしまうと、今後はそれを持ち出して次の仕事をもらおうと仕立て屋たちが考えていることなど手に取るように分かるからです。

そこで王様は言いました。

「皆の者。今回は御苦労であつた。どれも素晴らしい出来で一着に絞るには本当に心苦しく思うが、当初の予定通り選ぼうと思う。

その白いドレス。初々しい中にも華やかさと可憐さがある、まさにお披露目のドレスに相応しいと思えるが、どうじゃ」

嘆き姫に問いかけると、嘆き姫は扇子で顔を隠しながらもこくりと頷いて見せましたので、それを了承と受け取つて王様は言い渡し

ました。

「ではその白いドレスで決まりじゃ。報酬はあちらにいる者が渡す故、そのままさがってよい。御苦労であった」

仕立て屋たちは頭を深々と下げて報酬を受け取り城を後にしたとたん、この話を家族に言つて聞かせました。

嘆き姫がどんなに自分たちのことを気にかけてくださっていたかということ。

そしてこの話は瞬く間に心優しい嘆き姫の逸話として国中に広がりました。

第二夜

舞踏会はそれはそれは華麗に執り行われました。

近隣の国々からは王族が招かれ、十四歳の貴族の子女が社交デビューをお祝いするために色とりどりのドレスを纏い胸を高鳴らせました。

舞踏会が開かれる城の大広間では、デビューの参加者が一人ひとり名前を呼ばれ、緊張の面持ちで入って行きました。そして最後に王女である嘆き姫の名前が告げられると、歓声が上がリ、拍手をもつて迎えられました。

白い清楚なドレスを身にまとった嘆き姫の姿は、生まれたての女神のようにキラキラと輝いて清楚で可憐でした。

会場は大きくどよめきました。

あのうわさに聞く『嘆き姫』が心だけでなく姿も美しいとわかったのですから。

貴族たちが口々に嘆き姫を褒めた立っている中、一人の美しくたくましい王子が嘆き姫の前に立ち、ダンスを申し込みました。

「私は隣国の王子スハルと申します。よろしければ一曲お相手頂けますか？」

その言葉をきっかけに、音楽隊がこの日初めてのワルツを奏で始めました。

すると王子は嘆き姫に手を差し出してにっこりとほほ笑むと嘆き姫の手を取り、大広間の中央まで歩いていってワルツを踊り始めたのです。

清楚で可憐な嘆き姫と美しくもたくましい王子が一曲軽やかにステップを踏み終わると、会場に大きな拍手が鳴り響きました。

そしてそれから皆それぞれダンスを踊り始め、大広間に色とりど

りのドレスの花が咲き乱れました。

気がつけばすでに舞踏会も終わりを迎えようとしていました。それほど王子と過ごした時間は楽しく、早く過ぎ去ったようでした。

ひと組またひと組と王様に暇を告げる者たちが増え、残すところスハル王子と嘆き姫だけとなった時のことです。

嘆き姫は悲しむことを我慢していたのでしょう。いきなりほろほろと涙を流し始めたのです。

驚いた王子はもしかして自分が姫に失礼なことを言ったのではないかと思いましたが、姫は静かに首を横に振って言いました。

「今日デビューした娘の中に、私のために作られたドレスを身にまとっているものがいたのです。そのドレスを作った仕立て屋たちに申し訳ないことを……気の毒なことをしてしまったと思って……」

声をつまらせるように泣いている姫をまじまじと見つめて、王子は問いました。

「なぜ、仕立て屋たちが気の毒だと思うのだい？」

「なぜって……あのドレスは私のデビューのために作られたドレスなのです。けれど王がドレスの出来栄を競わせるように仕立て屋たちに作らせたのでそのドレスの中から一着を選ばなければなりませんでした。とてもとても美しく素敵なドレスでしたので、私はその中から一着を選ぶということができません。仕立て屋たちはそう言った私にあのドレスを下さると申し出てくれたのですが今度はどのドレスを私が舞踏会に着るかもめぐことが起こりましたので、王がこの白いドレスを選んで仕立て屋たちをさがらせたのです。」

私は私のために丹精をこめて作ってくれた仕立て屋たちに申し訳なく思うのです。

そのドレスを今日デビューした者がきているなんて、仕立て屋にとれば屈辱でしょう。本当に気の毒なことをしてしまいました」

そう言ってまたほろほろと涙を流し始めました。

いつもならここでそばにいる者が「なんておかawaiiそうなお姫様。そんなことまでお考えになるなんて情が深くていらつしやいます。どうかお心をお痛めくださいますな」と優しく姫を慰めてくれます。けれど今ここにいるのは今日初めて会ったばかりの隣国の王子でした。

スハル王子は不思議に思いました。

なぜかという、嘆き姫の言っている意味がわからないからです。ですから、ひとつ、疑問を嘆き姫に投げかけることにしました。

「姫はどういうときに心を痛めてしまわれるのでしょうか？」

すると姫は応えます。

「鳥に啜えられたみみずの痛みや、食べられてしまう不幸を思つて心が痛むときがあります」

そしてその時のことを思いだし、さらに涙を流したのでした。

王子は姫にまわしていた手をそつと外し、一歩さがりました。

王子の温かみを失って、そして慰めの言葉もなかったことに姫は驚き顔をあげました。

この話をするとき必ず誰もが「おかawaiiそうなお姫様」といつてくれるのに、今日一日楽しく過ごした王子は何も言ってくれず、それどころか姫から腕を外してしまったのです。

今までこんな冷たい扱いを姫は受けたことはありませんでした。

「王子様？」

「姫。今まで誰もあなたの話を聞いて、問うた者はいませんでしたか？」

さっきまで姫を見下ろした熱い瞳とはうって変って、氷のような冷たい眼差しで嘆き姫を見る王子に、姫は心底驚きました。

「……どういう意味でしょうか」

王子の言葉の意味を理解できずに、そして急に変わった皇子の態度が不愉快で、姫はその美しい眉間に醜い皺を寄せました。

「私は今、この瞬間まで、あなたの情け深い心と素晴らしい声、心が現れたような美しい顔立ちに恋をしておりました。そして将来は我が国へと嫁いでいただきたいと心の底から思っておりましたが、それはすべてまやかしかつたようです」

嘆き姫は当惑しました。

なぜなら今までそんな言葉を掛けられたことがないからです。

私は思慮深く情けも深い姫なのに

その考えが眉間に刻んだ皺をより深くして、美しい顔を醜悪へとかえました。

王子様はそんな姫の変わりようを平然と受け止めて、話を続けました。

「あなたは自分の考えが正しいと思われて、そしてそのことに対

して相手を気の毒に思っているようですが『みみずがかわいそうと心が痛みます』ですか？ではもしそのかわいそうなみみずを鳥から奪ったらどうなります？必死で見つけただろう食料であるみみずを『かわいそう』などといって取りあげてしまつてごらんなさい。今度は鳥がおなかをすかして飢え死にしていますよ。

それに『仕立て屋が気の毒』ですか。たしかに王に選んでももらえなかったということは残念なことですが、ちゃんと他の貴族に売つて利益をあげているではありませんか。もしあなたに献上すればその時はいいでしょうが、ふんだんに高価な布や宝石をちりばめたドレスにかかったお金や労力は無駄になるわけです。たしかに王とながりが持て、あなたともつながりがもてるかもしれませんが、同じようなことをする仕立て屋がいるわけですから結局のところ意味がありません。そしてあなたが三着ある中からどれがいちばん長く着るかでまた醜い争いが起こるでしょう。王の判断は正しかったのです。

思慮深い王の元にお生まれになられた。けれどあなたは『情け深い』とはほど遠い姫だとわかりました」

姫は俯いて、その愛らしい桜色の唇を酷く噛み、わなわなと震えておりました。

けれど耳だけは王子の言葉を聴き逃すまいと澄ましておりました。

「あなたはご自分に酔っているのですね。

何をして『かわいそう』と言つて涙を流せば、そばにいる者は『おやさしい』と答え続けたのでしょうか。ですが私から見ればあなたは『かわいそう』と同情されて、褒められて、崇められる、そのことに酔っている愚かな姫としか映りません。そんな愚かな姫を将来我が国の女王になど到底できるものではありません。

今日この一日は本当に素晴らしい時間を過ごさせていただきました。あなたの社交界デビューも素晴らしいものでした。

ただ、二度と私はあなたのもとには訪れますまい。

あなたは噂とは違う意味の『嘆き姫』なのですから」

王子はそれだけを言うと、震える姫に最後に一礼をして、王のもとに暇を告げに行かれました。そしてそのまま二度と姫に振り返ることなく大広間を後にしました。

第三夜

スハル王子が大広間から去った後、嘆き姫はその場で泣き崩れま
した。

こんなにも酷い言葉を言われたことがないからです。

姫には王子の言っている言葉の意味がわかりませんでした。

みみずだって命はあります。痛いのは嫌だろうし食べられるのな
らなおさら嫌でしょう。

仕立て屋のことにしてもそうです。

王女である姫が舞踏会、それもデビューを飾る舞踏会に自分が仕
立てたドレスを着るのと、貴族の娘が着るのとでは『格』が違いす
ぎるではありませんか。

貴族の娘がデビューで一日中着るよりは王女である姫が一時間で
も着ているほうがドレスの注目度が違うことですし、それを作った
仕立て屋にも箔もつき格もあがるというものです。

それに献上するとまでいわれたドレスを王様は購入したのです。
せつかくの仕立て屋たちの好意を無にすることですし、献上したほ
うが仕立て屋たちにとってもよい宣伝にもなるだろうに
そして姫はその三着のドレスが手に入るはずでした。

「やはり王子様は間違っていらっしゃる」

私の考えのほうがり理にかなってるとし、仕立て屋たちを気の毒に思
っても当然のことを思っているだけ。そのことを口にすることがか
違っているとも思っただけ。そうならば王子様は
とんでもなく薄情でいらっしゃるのだわ。だから私のこの思いをこ
理解いただけないでしょう。あれだけ端正なお顔立ちで立ち居振
る舞いも完璧な王子様でいらっしゃるというのに、なんてお気の毒

なことでしょう。

嘆き姫はスハル王子を思っ て静かに泣き始めました。

その一部始終を見ていた者がいました。

以前から嘆き姫の『お気の毒』という言葉にうんざりしている者でした。

嘆き姫はいつも誰かに『おかわいそうに』と声をかけられて慰められていましたが、その時いつも姫の口元が笑って見えるのがずっと気になっていたのです。

翌日の昼過ぎには、この話が城内中の噂になりました。

そうすると、なんと姫の嘆きに疑問を持っている者がつぎつぎに現れたのです。

そしてその者たちが今度は城下町に、そして城下町の者たちが国中にと話を広めていきました。

いつのまにか、嘆き姫の噂は二分化していったのです。

心が優しすぎていつも気の毒に思っ て憂いている『嘆き姫』と、誰かにいつも「おかわいそう」と言っ てもらったために嘆いている『嘆き姫』。

人はよい噂よりも悪い噂のほうが好んで話すものですから、本当にあつという間にこの話はすそのまで広がり、人々に姫に対して不信感が植えられてしまいました。

『嘆き姫』の話は瞬く間に近隣の国々へと流れていきました。

数年後、見目麗しい女性に成長した嘆き姫に求婚者は後を絶たせませんでした。が、姫はどの求婚者にも心を奪われることがありませんでした。

どうしてもスハル王子の言葉が耳について離れないせいです。
王子の言うことは間違っていると思っではいるものの、どうしても言葉が耳を離れません。

私はスハル王子が言うような酷い人間ではないわ
人の痛みや苦しみが、人よりちよつとわかるだけのことなのに

そんなある時、姫の国に国力なしと見定めた隣国が攻め入ってきました。

姫は城の一角で侍女たちとともに恐ろしさに震え、悲しみに涙していました。

どうして隣国はこんな意味のないことをするのかしら

こんな嫌な思いをしなくてはならないなんて、私たちはなんて酷い星の下に生まれてしまったのかしら

そう言っで泣き崩れ、周りの者たちの同情を一身に集めておりました。

どこかどかと力強く城を歩く音が聞こえてくると同時に、姫と侍女たちが隠れている部屋の扉が大きく開き、そこから光を背にした一人の男が何かを投げ入れて寄こしました。

その光を背にした男は、成長し、国の王となったスハルでした。
そして投げ入れられたものとは、父王の生首だったのです。

部屋のあちこちで恐怖に震えた声と悲鳴が上がりました。

そんな中、姫は恐れをしないようにゆつくりと前に進み出て、その父王であつた生首を両手で持ち上げて額にキスをしました。

「なんておかawaiiそうなお父様。このような姿になってしまわれて……」

はらはらと、姫のふせた目から涙がこぼれおちました。それをじつと見ていたスハル王は、高らかに笑いだしました。

「何がおかしいのです。父王をこのような姿にかえた者が」「いやなに。そなた、かわらぬな。年を重ねて少しは変わったかと思うておったが、情けないほどに昔のままの『嘆き姫』よ」

あの舞踏会で味わった冷たい眼差しよりもさらに見下され、わなわなと屈辱に震える姫にスハル王は話しかけました。

「そなたが少しでもその愚かしさから成長しておれば、このような日も迎えることはなかっただろうに」

聞き捨てならない言葉に、父王の生首を落とした姫が笑うように叫びました。

「私？私のせいとでも？」

「そう言っているのだが、そのように聞こえぬか？」

「私は何もしてなどおりません！」

「そう。そなたは何もしてなどおらぬよ。ただ、そこにいて何かの愁いを見つけては自分の徳になるように話を紡いで嘆いているのみ。そして周りの者から『おかawaiiそうに』と慰められて、もてはやされては悦にはいつているだけであろうよ」

「そのようなこと　！」

「ない、と申すのか？ではそこにいる侍女に確かめてみてはどうだ？そやつは今視線を外したではないか。その後ろにおる者もそうであろうよ。我に怯えるのではなくそのことを指摘されることに怯

えているではないか」

姫が後ろに控えている侍女たちをちらと見ると、スハル王の言うように二人とも姫と視線を合わせようとはしませんでした。

「それにこの首の王がかわいそうだといったな？ 本当にかわいそうなのはいったい誰かわらぬか」

スハル王は王の首を落としたばかりの血糊のついた刀を姫に向けて、必ず答えるように促すと

「……父を亡くした私、ですか……」

「馬鹿なこと！ そなたなどかわいそうであるわけがなかるう。やはり『嘆き姫』のあだ名は伊達や酔狂ではないとみえる。誰がかわいそうか。それはこんな愚かな王と不愉快な姫を仰がなければならなかった国民よ。王が昔のままの王であつたなら、そなたが少しでも心入れ替えたのなら、このような戦火の渦に巻き込まれなくともすんだものを」

「なにを……！ 戦争を仕掛けておいて何を戯言をいわれるのですか！」

「仕掛けたとも。今が勝機。愚かにも娘の性分に惑わされ、国民の信賴が遠のいた王室など、もろい。この国の国民が流民となつて我が国に流れ込んでできているとゆうに、そのの娘にも見放された床に転がる王は何もせぬ。動かぬ。だからこそ我が国が動いたのだ」

スハル王の見る先には、さきほど嘆き姫の手からこぼれ落ちた父王の首がありました。

父王の澱んだ瞳はまるで自分を責めているように見えた姫は、思わず両手で顔を覆いました。

「そなたがそのような性分だからこそ、この国の王まで近隣諸国から見下されるのよ。そなたの性癖を直すことも、国民を二分化するほどの噂を沈静化することもできぬ王に、国を動かす正当な判断ができるはずもない。近頃ではこの国の王は子煩悩に目がくらんだ愚か者として名高いことを、そなたは知っているのか？」

初めて聞く話に驚いた姫は、真のことかと周りを見回してみても誰も姫に返答する者はいませんでした。それどころか誰一人姫を見ようとはしなかったのです。

それほど姫は周りの者から信頼されていなかったということに今さらながらに気付いたのですが、それはもう遅すぎたのです。

姫の嘆きによって、職を追われた者がいました。

姫の嘆きによって、質素な生活を余儀なくされた者がいました。

姫の嘆きによって、人とかかわることに恐怖を覚える者がいました。

権力があるものがその時ばかりに耳触りのいい言葉を紡いだおかげで、悲惨な目に会う人がどれだけ多かったことが。

スハル王は、最後に一言言いました。

「嘆き姫よ。その名の通り嘆き悲しめ！」

そうして父の血が乾かぬうちに、同じ刃で姫も父の後を追いました。

スハル王は、血をぬぐうために大きく刀を振り上げて、一振り下ろしました。

刃の先には父王に添うように嘆き姫の醜く歪んだ顔が並んでおり

ました。

そうしてまたスハル王は舞踏会の時と同じように、二度と振り返ることなく部屋を出ていきました。

第三夜（後書き）

どうして主人公である嘆き姫が殺されなければならないか？ということテーマにして書きました。

最後まで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0609v/>

嘆き姫

2011年7月23日19時47分発行